



# 営農タイムリー！



## 発生予察情報について(8月)

2024年7月26日発行

### 病害虫発生予報第6号(8月)

京都府病害虫防除所より、8月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第6号(8月) (抜粋)

##### 予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	いもち病(穂いもち) 紋枯病 セジロウンカ トビロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類 コブノメイガ	やや少(やや少) 並(やや多) 多(多) やや多(やや多) やや多(多) 多(多) やや多(やや多)
ズドウ	べと病	やや少(やや少)
カキ	炭疽病 うどんこ病	並(並) やや少(並)
果樹全般	カメムシ類	多(多)
果菜類	うどんこ病 ハモグリバエ類 アザミウマ類	やや少(並) 並(やや多) 並(やや多)
キュウリ	べと病 褐斑病 炭疽病 斑点細菌病	やや少(やや少) 並(並) やや少(やや少) 並(並)
ネギ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	やや少(並) 並(やや多) やや多(やや多)
野菜全般	ハダニ類 ハスモンヨトウ	やや多(並) 並(並)

# イネ

## 1. 葉いもち（穂いもち）

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- (2) 穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- (3) コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (4) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) **カメムシ**との同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。

## 2. 紋枯病

予報内容 発生量： 平年並（前年比やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 分けつ期ころに水際の葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- (2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように散布する。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (5) 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。



## 3. セジロウンカ

予報内容 発生量： 平年比 多い（前年比 多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。



## 4. トビイロウンカ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫であり、今後発表される病害虫発生予察情報に注意する。
- (2) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (3) 株当たり5頭以上もしくは短翅虫を10株当たり2頭以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。



幼虫



成虫



被害水田

## 5. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、**すす病**が発生する。



雄、雌



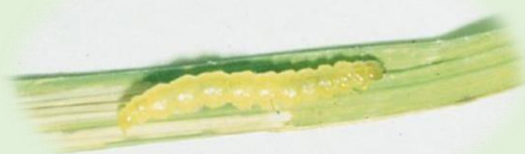
萎縮病

## 6. コブノメイガ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫である。
- (2) 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。



中齢幼虫



被害



## 7. 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量 : **平年比 多い (前年比 多い)**

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (2) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、草刈り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (3) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除(共同、一斉)が有効である。また、粒剤では種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (4) これまでに山城地域と丹波地域の一部で**ミナミアオカメムシ**の発生を確認している。本種は、他の**斑点米カメムシ類**に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。
- (5) 近年、**イネカメムシ**の発生量が増加している。他の**斑点米カメムシ類**と異なり、出穂期に水稲の籾の基部を吸汁すると、不稔籾を生じさせ、穂揃い期以降に加害されると籾の基部が変色した斑点米を生じ、等級格下げの原因となる。他の主要な**斑点米カメムシ類**と異なり、穂揃い期以降ではなく出穂期に防除することが重要である。

アカヒゲホソミドリ  
カスミカメ



アカスジカスミカメ



ミナミアオカメムシ幼虫



ミナミアオカメムシ



イネカメムシ

# 果 樹

## 1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生適温は22~25℃である。雨が多く、気温が低めに経過する冷夏の年は多発しやすい。

## 2. カキ 炭疽病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除を徹底する。

## 3. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15~25℃である。8月の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。
- (2) 8月下旬頃から発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。

## 4. 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **カキ**の被害は7月中旬以降に発生することが多い。  
8月中下旬までに加害された果実の多くは落果する。
- (2) **カメムシ類**は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (3) 収穫期が近い果樹は、他の病害虫防除も含めて、農薬の使用にあたっては**使用基準 (特に収穫前日数)**を厳守する。
- (4) **合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避ける。**

チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ



ツヤアオカメムシ

# 野菜

## 1. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20℃前後、比較的低い湿度で多発する。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (4) **トウガラシ類**では、ハダニ類による被害との判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (5) 菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

キュウリ



かぼちゃ



トマト

## 2. キュウリ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

## 3. キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。
- (3) 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- (4) 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (5) 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

#### 4. キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

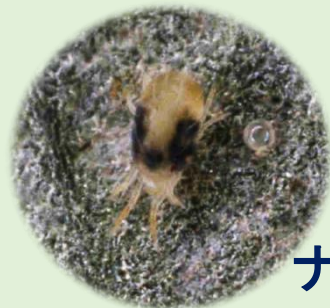
- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔等から入って発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

#### 5. 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量：平年比 やや多い（前年並）

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除を行う。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。



ナミハダニ



カンザワハダニ



チャノホコリダニ  
被害果実

#### 6. 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年比 やや多い）

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **トマトハモグリバエ**は、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。



成虫



成虫による  
被害



幼虫による被害

## 7. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年並 (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アザミウマ類**には直接加害するだけでなく、**ミカンキイロアザミウマ**や**ネギアザミウマ**等**ウイルス病**を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

ミカンキイロアザミウマ



ヒラズハナアザミウマ



ミナミキイロアザミウマ

## 8. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **ネギアザミウマ**は、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。**ネギ**では葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となる**アイリス黄斑ウイルス** (Iris yellow spot virus: IYSV)を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、**赤色系防虫ネット**や**UVカットフィルム**による物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は**系統の異なる薬剤をローテーション散布**する。



幼虫



成虫





## 9. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並（前年比 やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。



幼虫



成虫



## 10. ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比 やや多い（前年比 やや多い）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

卵



幼虫



成虫

